健康社会学研究会

ニューズレター No.53

発行：健康社会学研究会　〔ホームページ〕 http://www.fureai.or.jp/~ribbon/healpro/
事務局：〒504－8504 岐阜県各務原市那加桐野町2丁目43 東海学院大学短期大学部 森川研究室内
FAX：058－383－5455　E-mail：healpro@tokaigakuin-u.ac,jp
ニューズレターNo.53／2009年1月　編集担当 ：臺 有桂

新年挨拶

３つの「C」で未来を拓く

健康社会学研究会　代表 松岡正純

新年明けましておめでとうございます。

会員皆様には、気持ちも新たに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

我が国は、米国に端を発する金融危機のあおりを受け、「100 年に1度」といわれる深刻な経済不況に陥り、底なしの景気低迷の真っ只中にあります。急激な企業の業績悪化により倒産や派遣切りといわれる非正規雇用者の解雇など、明日の我が身も揺らぐ先の見えない社会情勢が、国民全体に一層の生活不安を引き起こしています。

国の2009年度予算は、景気対策を最重要視し、一般会計歳出を過去最大の 88.5 兆円、国債発行額は 33 兆円余りにのぼり、借金だけが雪だるま式に膨らみ続けています。

また、環境問題、食糧問題、介護・医療問題、年金問題等、待ったなしの各種問題に対し、有効な手立てが講じられないまま、問題が先送りがされています。

さらに、2008年の人口減少が5万1千人と過去最大となり、我が国は確実に人口減少社会に向かって動いています。

新年から暗い話題となりましたが、私は、現在の社会事象から、未来に希望を生み出す大切なシグナルを感じとっています。閉塞感漂う社会を「Chance」（好機）と捉え、次の時代を切り拓く新たな試みに「Challenge」（挑戦）し、今こそ時代を「Change」（変える）するという、未来志向の発想が大切ではないでしょうか。

現在の社会状況を見る限り、今まで数々の成長を生み出してきた成功モデルはもはや限界と言わざるを得ません。一旦、これまでの成功モデルを脇におき、未来を見据えた新しいモデルの構築に向かって、まず一人ひとりが意識と行動を「変える」ことが、社会全体に求められている気がします。

私は、「Chance」、「Challenge」、「Change」の3つの「C」を胸に刻み、これからも当会の充実した運営に努めていきます。本年からその一環として、出版企画を本格始動させ、2年後を目標に「健康社会学研究会」による出版を実現させたいと思います。

本年も会員皆様のそれぞれの研究・教育・地域での活動が、実りあるものとなるよう祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

月例研究会（9 月） 報告

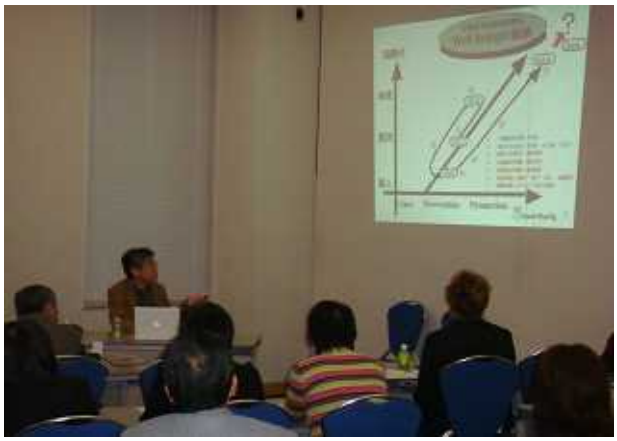
報告者　渡辺多恵子

去る，9 月 20 日（土），日本子ども家庭総合研究所（東京・麻布）にて、月例研究会を開催いたしました。『学会発表リハーサル』というテーマで、「本番前に発表内容やスライドへの意見が欲しい」、「リハーサルをして度胸をつけたい」といった発表を予定している方々、発表に対してコメントをくださる方々、あるいは、様々な学会発表を見学してみたいといった方々を募り、発表時間や形態はエントリーする学会に即して設定するといったかたちでの開催でした。リハーサル演題は、研究者、専門職、学生などから合計 5 題の申し込みがあり、コメンテーターとしては、同様に、研究者、専門職、学生など約 10 名の参加がありました。

9 月 27 日（土）に、小児保健学会（札幌）での発表を予定していた私は、「このチャンスを逃すのはもったいない！」と、発表者として参加申し込みをしていました。月例会当日、私は、次週には本番を控えていたにもかかわらず、スライドも未完成のままトップバッターでリハーサルに臨みました。十分に準備できていなかったのですから、発表は散々でした。しかし、このリハーサルを通して、発表を通して自分がもっとも伝えたいことが何なのかを改めてはっきりさせることができ、限られた短い時間の中でそれを効果的に伝えるにはどうしたら良いのかを改めて考え直すことができました。それは、学会や研究会など、数多くの場を踏んでいる経験も知識も豊富な会場の皆さんから、貴重なご意見や、想定される質問をたくさんいただくことができたからです。本番までには、最善のスライドと発表原稿、そして、質疑応答の準備をすることができました。他の発表者のリハーサルからも、たくさんの学びがありました。スライドの見せ方や、ポイントをとらえた語り口など、見習いたい要素があふれていました。

今回のように、本番の前に発表の練習をしたり、アドバイスを頂いたりする機会は貴重です。今回のような研究会が、学会シーズン前の恒例行事として位置づけられ実施されることを期待しています。

第 67 回日本公衆衛生学会　自由集会　報告



報告者　齊藤恭平（東洋大学）

去る，11 月 5 日（木），第 67 回日本公衆衛生学会（福岡）にて，NPO 法人 Well-Being の岩井梢さんに世話人を務めていただき自由集会を開催いたしました。

同じく NPO 法人 Well-Being の中村譲治先生を講師としてお招きし，「みんなで語ろう，

これからの保健活動！ Health promotion 2008」テーマに、話題提供の講演と参加者全員による熱いディスカッションが実施されました。近年、参加数が低迷気味だった本研究会の自由集会でしたが、用意した会場が一杯になるほどの参加と熱い雰囲気がありました。

中村先生の話題提供では、オタワ憲章以降のヘルスプロモーションに関する国内の理解のされ方や、具体的な活動状況を中心にお話いただきました。今一度、ヘルスプロモーションの理念や意義を確認する有意義な時間でした。参加者の皆さんからは、特にヘルスプロモーションの「坂道の図」の限界や、「健康」、「QOL」の捉え方に共感が得られていました。コーディネータ役の私の個人的な意見としては、「坂道の先はどうなっているのか？」という中村先生の問題提起が印象に残っており、ヘルスプロモーションが最終的に目指すゴールを考える良い機会となりました。中村先生ご自身が Well-Being の活動を通じて地域の健康増進計画の支援を中心に、具体的なヘルスプロモーション活動を展開されている方ですので、とかく抽象的で理念的だと批判されるヘルスプロモーションが、現実の活動として皆さんに理解されていたようでした。またツールとして一世を風靡した MIDORI モデルのその後や、それに続く新たなオリジナルモデルの提示など、参加者にとっては短い時間で収穫の多い話題提供でした。

後半は話題提供に対する「理解」と「共感」をテーマに 3～4 人によるディスカッションを行い、その後、参加者全員による意見表明が展開されました。参加者も都道府県（保健所）や市町村の行政関係者や大学等の教育機関、研究機関、出版関係など多様で、それぞれの立場より様々な意見が出されました。ヘルスプロモーションにおける行政（都道府県・市町村）のあり方や、大学や研究者の支援のあり方、住民参加・協働のスタイル、地区組織活動の強化方法など、まさしくヘルスプロモーションの活動領域や支援方法につながるような意見交換が展開されました。また、QOL から QOD（quality of death）を考えることの必要性が提言され、ヘルスプロモーションの目標としての QOL や Well-Being を考えることのできた、深い意見交換の時間でした。

ご参加いただいた皆さん、そして，会場や懇親会（2次会、3次会まで）をアレンジしてくださった Well-Being の関係者の皆さん、本当にありがとうございました。

今度は秋の斑鳩で盛り上がりましょう！

第 42 回　健康社会学セミナー報告

報告者　森田健太郎

平成 20 年 12 月 6 日（土）に日本子ども総合研究所にて第 42 回健康社会学セミナーが以下の内容で行われました。限られた時間の中でしたが“家族”というテーマのもとに改めて健康社会学の重要性というものが認識できた有意義なセミナーでした。

基調講演　「現代家族の抱える問題とその研究方法」
順天堂大学　スポーツ健康科学部健康学科　教授　島内憲夫先生
シンポジウム　「各職種から家族の機能を考える」
保健師の立場から　市原市保健センター　鈴木　茜
管理栄養士の立場から　埼玉県三芳町役場健康福祉課　池田　康幸
歯科医師の立場から　医療法人内田歯科医院　森田　健太郎
助産師の立場から　日本子ども家庭総合研究所　白子　純子
就労支援の立場から　茨城障害者雇用支援センター　黒岩　直人

基調講演報告

“あなたの思う家族の色は何色ですか？”

こんな質問から講演は始まりました。

サザエさん的な家族像やちびまる子ちゃん的な家族など幸福な家族が思い浮かぶ一方で、虐待や DV などさまざまな不幸な家族生活も思い浮かぶかも知れません。

サザエさんのお茶の間で思い浮かぶと思いますが、昔はちゃぶ台を囲んでの一家団欒でのコミュニケーションだったのが、徐々にカウンターへと変わって来ていることなどを例に挙げながら家族の意識の変化が起きていることを事例として紹介くださいました。

そして、現在の“家族”を知る上で必要な研究方法を提示していただきながら、

1. “家族”の定義と現代家族の機能
2. “家族機能”をめぐる論争と現代家族に必須の機能
3. “家族ストレス”とその問題点
4. “家族保健”の方法
5. おわりに～理想の家族の創造～

といった各テーマに沿って家族機能の変化や現代家族で必須の機能、さらには家族が抱えている問題点をどう解決していくのかということ、そして、日本の“家族”は“相互依存の中での自立”というのがキーワードかもしれませんというお言葉で締めくくられました。

シンポジウム報告

各職種の方々から、現場の事例や日々現場で接しながら感じている家族の機能を中心の報告がありました。

それぞれとても興味深い内容で各 15 分という時間がとても短く感じられる内容でした。

シンポジウムでは、家族のあり方について歴史を振り返ると普遍なのか、年齢・世代において違いがあるのか、子どもの社会化についてなどの質問や、親が親になりきれていない状況が見られる中で“親教育”が必要なのかもしれないという示唆もありました。

島内先生からの最後にいくつかこれから考え解決していくべき課題が出されました。

① **社会の制度・規範**

親と子の新しい新機能創造のなかで社会の承認が必要なのではないか。

② **家族の装置・シェルター**

日本のうちは“にわとり小屋”といわれるが改善が必要なのではないか。

③ **間柄・家族関係**

以上の 3 点がこれからの“家族”を捕らえる上で重要であるとのことでした。

事務局からのお知らせ

新入会員　平成 20 年 1 月～12 月／2 名（敬称略）

下園美保子（山梨大学大学院医学工学総合研究部社会医学講座）

助友裕子（国立がんセンターがん対策情報センター　がん情報・統計部）

１．20 年度会費について

所定の払い込み用紙（未納の方のみ同封）、もしくは銀行振込にて平成 20 年度会費の納入をお願いいたします。

２．会費 3 年以上未納について

以下の方（敬称略）は、18、19、20 年度の会費が未納です。未納の場合、今年度末で退会扱いとなりますので、ご注意ください。

岡田　栄

≪会費納入先≫

○ 郵便振替：00100－8－41025

○ 銀行口座：

みずほ銀行広尾支店　普通　1842122

健康社会学研究会　代表　松岡正純

十六銀行　日野支店　普通　1238746

健康社会学研究会　代表　松岡正純